

保 育

試す意欲をかき立てる教師のきっかけづくりとは

—疑問を解決していこうとする保育実践から—

君 岡 智 央

1. はじめに

篠原(2009)は「子どもの『?』はダンゴムシやオタマジャクシなどの生き物はもちろん、植物の生長の変化、風や雨、光や影などの自然現象、砂や土などの自然物から、粘土や積み木などの遊具、製作物などいろいろな場面で湧き起こるのである。」¹⁾と述べている。確かにこうしたものや現象などに積極的にかかわる場面で子どもたちは「不思議だなあ?」「どうなるのだろう?」「何でうまくいかないの?」などと疑問を抱く。そして、疑問を抱いたことをきっかけに「やってみたい!」「試してみよう」などと好奇心が湧き起こる。子どもたちが疑問を抱き好奇心が湧き起こると、考えたことを自分で試して解決してみようとする姿が実際に見られる。また、友だちが考えて試してみたことによる出来事に感動し、自分も同じように試してみる姿も見られる。しかし、その一方で、遊びの中でうまくいかないことや不思議に思うことがあり、疑問を抱いて考えたことがあっても試していくことを少しためらってしまう子どもの姿や試してもうまくいかないとすぐにあきらめてしまう姿も実際に見られる。上坂元(2009)は「私たちは子どものかわりに身を置くとき、子どもが本来もっている『なんだろう?』『どうなっているのだろう?』『なるほど』『もつとやってみよう』という好奇心・探究心をいかんたいせつにし、伸ばすことができるものかと考える。」²⁾と述べている。このことから、子どもたちが本来もっている疑問を抱く心や好奇心を教師がどれだけ大切に伸ばしてやれるかによって、自ら考え試していく子どもになっていくと考える。

それゆえ、試すことへのためらい、うまくいかないとあきらめるといった子どもの姿に対して“試す意欲をかき立てるためのきっかけ”が必要であると考えた。そのため、“試す意欲をかき立てるためのきっかけづくり”とはどのようなかわりであるかを明らかにする必要がある。そこで今回のテーマを設定し、研究をすすめることにした。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

子どもたちは3歳から5歳の各年齢の中で、それぞれの年齢なりに「不思議だなあ?」「どうなるのだろう?」「何でうまくいかないの?」などと疑問を抱いたり、「やってみたい!」「試してみよう」と好奇心が湧き起こったりしている。年長児になると抱いた疑問を友だちと共有し、考えたことなどを出し合い、ともに試していきながら疑問を解決していくことができると思う。よって、以下のような子どもの姿を年長児に設定して研究をすすめていった。

遊びの中で抱いた疑問に対して、自分なりに気づいたことや考えたことを友だちと互いに話し合いながら、意欲的に試していく子ども

(2) 方策について

設定しためざす子どもの姿を受けて、次のような方策を考えて実践した。

子どもたちの遊びに応じながら、魅力的で疑問を抱くような素材を用意する。

うまくいかずに途中であきらめてしまっていたら、行き詰まっていることや疑問の内容に応じて教師が励ましの言葉をかけながらも再度“やっ

みよう”と思えるきっかけをつくっていく。

クラスで子どもたちが個人または友だちと実際にやってみて、疑問を抱いたこと、気づいたこと、わかったことを伝えることができるようにする。疑問を抱いたことを伝えた時は、子どもたちの間で「～してみたらどうかな?」「～だから～してみたらいいよ」「やってみたら～になったことがあったよ」などと自分の考えや気づきなどを出し合えるようにする。疑問を解決し、気づいたことやわかったことを紹介した時はあきらめずに取り組む姿勢が見られたところをしっかりと認めていくようにする。

3. 実践事例

実践例1「ひねりごまで遊ぼう！」（9月）

「ナットをつけて回してみよう！」

子どもたちの間でベーゴマの話が盛り上がっていた時に、クラスにあったひねりごまを用意し、遊べる環境をつくっておくと子どもたちが次第に遊び始めた。ひねりごまでの遊びに楽しさや魅力を感じるようになると、子どもたちはひねりごまに色紙やタフロープなどいろいろなものをつけて回し始める。そこで、教師はひねりごまにつけるものの重さによって、回転に影響があることを子どもたちに気づかせようと6種類の大きさのナットを用意する。早速、子どもたちがナットをつけて回し始める。A男、B男がやってきて「これ鉄だから、つけて回したらかっこいいね」と言いながら、一番大きいナットを軸につけて回し始める。するとナットとひねりごまは、回るどころかゴロゴロと転がっていく。回らないことに疑問を抱いたA男、B男は何度か回してみても回らないので、いろいろな大きさのナットをつけて回してみることにする。試していく中で一番小さいナットをつけるとよく回り、A男、B男から「回った!」という声があがる。今度は、一番小さいナットを2個、3個と軸に重ねて繰り返し回している。確かに回るが、ナットを重ねるほど勢いが弱まってしまう。A男、B男が一番小さなナットを1個つけて回し

続ける。

遊んだ後にクラスの子もたちが集まった時、ひねりごまにナットをつけて回してみたことについて教師が「どうだった?」と声をかける。A男がすかさず「大きいのは重いから回らないよ!」と答える。教師は「重いから回らないんだ。じゃあ、小さいナットは?」と聞き返す。今度は、B男が「回るよ」と答える。教師が「何でかな?」と聞くとB男は「軽いから!」と答える。教師は「小さいナットだと回って、大きいナットだと回らないんだ」と驚くように共感する。A男とB男は嬉しそうに「そうだよ!」と答える。すると、C男が「僕がつけた時、(ナットが)飛んでいったよ。だからね、ひねりごまでの競争の時にナットを飛ばして相手のひねりごまに当てたら勝てるかもしれないよ」と一番小さいナットをつけて回したことを話し始める。教師は「ひねりごまにナットをつけて回したら、ナットが飛んだんだね。競争の時に、そういう方法もできるよね」とC男の考えに驚き、共感する。

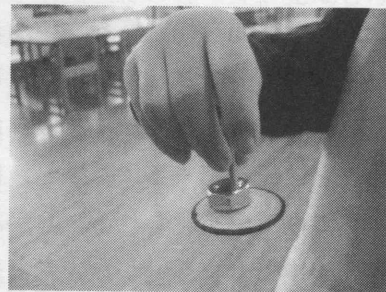


図1 ナットをつけてみたよ

【考察】

これまで、子どもたちは軽い素材で簡単にひねりごまを回していた。そこで、重さが違ういろいろな大きさのナットを用意してみた。ナットを見た子どもたちは、六角形で鉄製であることに魅力を感じ、「つけて回してみたい」という思いをもつとともに大きいナットをつけても“当然回る”と思っていた。しかし、回らなかったことで子どもたちが“何で回らないの?”と疑問を抱き、抱いた疑問に対して“知りたい”という欲求が芽生えて試し始めたことがわかる。子どもたちが遊び

の中でいろいろな疑問を抱き、抱いた疑問に対してあきらめずに意欲的に試していくことが遊びを充実させることにつながる。子どもたちにとってやってみたいと思える魅力的な素材であるとともに、疑問を抱かせる素材を使えるようにすることは、意欲的に試していくきっかけをつくるために必要であると考えます。

子どもたちの気づきを教師が受け止めて共感し、クラス全体に伝わるようにしたことで、ナットを飛ばしたり当てたりするという新たな遊び方を子どもたちは知った。この時期に年長児の子どもたちは、互いの考えや気づきを積極的に伝え合い、受け入れ合いながら遊びをすすめていく。そのために教師が、子どもが考えた新たな遊びを意図的に伝え合う場を設け、試したり工夫したりするきっかけをつくっていくことが大切であると考えます。

「ナットをつけて回すと本当に飛んでいくのかな？」

教師は、前日のC男の考えに驚き共感した子どもたちがナットを飛ばす（ナットが軸からはずれて転がる様子が、子どもたちにとっては飛んだように見える）ことを目的にして回すことを予測し、この日もナットを出しておき時間をかけて遊べるようにした。すると、集まった子どもたちがひねりごまにナットをつけて中華鍋の中で競争したり、なんとか飛ばそうとしたりしている。しかし、何度回してもなかなかナットは飛ばない。ナットを飛ばすことについては、偶然飛ぶことが多いので、狙って飛ばそうとしてもなかなか飛んでいかないのである。子どもたちはナットが飛ばないことに疑問を抱きながらも、あきらめて遊び方を変えようとする中で、D男が「飛んだ！」と声をあげる。小さなナットが、軸から勢いよく飛び出して転がっている。教師が「おおっ。すごい」と声をあげる。D男はその後にもナットを飛ばそうと回し続ける。教師はD男の様子を見守る。

しばらくして、ナットが飛んだことについて教師が聞いてみるとD男は「ナットを2個つけたら

1個、飛んだよ」と答える。更に「ナットの上に色紙を載せたら飛ばないよ」とナットの上に色紙を載せたことを話す。教師は、「へー。そうなんだ。すごいことに気づいたなあ」とG男の試して気づいたことを認め納得する。

【考察】

教師による前日のきっかけづくりにより、子どもたちがナットを飛ばすことに好奇心が湧き、友だちと一緒に意欲的に試していた。しかし、遊びがうまくいかず疑問を抱いていれば、そういう時こそ、子どもたち同士でどうしたらよいか考えたり、気づきなどを伝え合ったりできるようにする教師のかかわりが必要となってくる。子どもの好奇心を育て、試す意欲をかき立てるには、子どもたちの間で考えや気づきを伝え合うかかわりが必要になってくるのではないかと考える。

こうしてひねりごまでの遊びが盛り上がっていく中で、E男のような姿も見られた。次の事例は、E男が友だちと一緒に疑問を抱いたことを試し始めるまでの過程をつづっている。この時のE男と教師のかかわりを取り上げる。

「ぼくは、もうしないよ！」

クラスのみんなでひねりごままで遊んでいた時のことである。突然、E男はひねりごまでの遊びをやめ、他の遊びを始めた。教師は「どうした？もうしないの？」と声をかける。E男は「もう、しない！」と言う。教師は他の子どもたちのひねりごまでの遊びの様子をE男に伝えながら、一緒に遊ぶように促すが、最後には「もういい！」と言いながらE男は怒ってしまう。子どもたちの希望もあり、ひねりごまの遊びをクラス全体で続けて遊ぶ日もあったが、E男は他の遊びをしようとする。この時、教師がひねりごまを回して見せたが、興味をもとうとしない。教師はどうしたものかと思いつつも他の子どもに呼ばれ、E男がいる場所から離れる。

しばらくして教師はE男に「どうしてしない

の？ほら、こんなに簡単に回せるよ」とひねりごまを回しながら聞いてみた。E男は「だって回らないよ！」と答える。教師は「ほら、簡単に回すよ」と再度、回して見せながら教師はひねりごまを回していた時のE男の姿を思い返す。ここで、教師はようやくE男がうまく回せていなかったことに気づき、「はっ」とする。そして、「E男君はもしかして、回してみたけどうまく回せなかった。それで回したくないのかな？」と声をかける。E男はうなづき、「だって、何回やっても回せないんだ」と少し強い口調で答えた。そこで教師は、「くやしかったんだね。先生と一緒に少しずつ練習してみないか？」とE男の気持ちを受け止め、練習に誘ってみる。すると、E男はどうしようかと迷う素振りを見せたが、教師と一緒に練習することにする。数日間の少しの時間だが、練習を重ねていくことで回せるようになる。E男は「回った！ほら」と回せるようになったことを喜び、自分から回すようになる。やがて、「色紙をつけても回るかな？」と言い、色紙を切り取ってひねりごまにくっつけて回す姿が見られる。E男は、色紙をつけても回ったことを嬉しそうに友だちや教師に話す。近くにいる友だちが「本当だ！」と驚いている。更にE男は「これをつけても回るかな？」と言いながら自分でいろいろな素材を見つけ始める。そして、ひねりごまに何かをつけて回してみるという、同じ目的をもった友だちと一緒に試しながら回し始める。

【考察】

子どもたちは「やってみたい！」という意欲、好奇心をもっている。しかし、実際にやってみてもうまくいかず、自分の力やうまくいかないことに対してもどかしさを感じたりいらだったりすることがある。この時のE男も同じである。E男はうまくひねりごまを回せない悔しさを誰にも受け止めてもらえなかったことから、遊びをやめなくなったと考える。これは、E男のくやしい気持ちが込められたサインである。こうしたE男のサインを教師がすぐにキャッチせず、受け止めること

もなく、やらないのなら「やってみよう！」とただ、声をかけて誘うだけでは、E男が輪をかけてやろうとしなくなるのは当然である。教師は遊びの中で子どもたちが思いや気持ちを込めて送っているサインをしっかりと受け止めていくことが大切である。E男が自分の気持ちを受け止めてもらった後、教師とともに練習し、回せるようになったことで自信をもったことがわかる。“うまくいかないからあきらめる”といった子どもの姿に対し、教師は否定的にとらえるのではなく、子どもの気持ちに近づく絶好の機会ととらえ、気持ちを理解しながら自信がもてるようにかかわっていくことが大切だと考える。そうすることが、自分から試してみようとしたり友だちとともに試してみようとしたりすることにつながっていくと考える。

実践例2「ビー玉転がしのコースを作ろう」

(11月)

「何でうまく転がっていかないの？」

この頃にクラスの中で、積木のコースで作るビー玉転がしを楽しむ姿が見られた。この遊びで、子どもたちは転がしたビー玉をジャンプさせたり積木を倒したり動かしたりすることを楽しんでいった。これをきっかけにF男、G男、H男、I男、A男らが集まりトイレットペーパーの芯や筒、カップなどをたくさん取り出して手作りのビー玉を転がすコースを作ろうとしている。そして、子どもたちがトイレットペーパーの芯を何本もくっつけて長いコースができる。しかし、スタート地点のコースが下に下がっているためビー玉はゴールに向かって転がっていかない。子どもたちはゴールに向かって転がっていかないことに“何でうまく転がっていかないの？”と疑問を抱いている。そのため、コースの向きを変えたり作り変えようとしたりしているが、半ばあきらめかけている。教師が「どう？うまく転がった？」と聞くとF男が「転がらんよ。うまくいかないよ」と答える。教師は「何で転がっていかないのかなあ？」と話し、子どもたちと一緒に考えてみる。すると、G男が「まっすぐじゃないから転がらないよ」と

答える。教師が「まっすぐじゃない？ どうしたらいいのかな？」と聞いてみる。すると、H男が「わかった。坂じゃないから、ビー玉が転がっていかないんだよ」と答える。G男がうなずいている。G男、H男の考えをきっかけに子どもたちがコースに傾斜をつけて転がし始める。ビー玉がスタート地点から転がり、子どもたちが喜ぶ。教師は「すごいね。みんなで考えてやってみたら、転がったね」とF男、G男、H男、I男、A男らに話す。

【考察】

教師が「何で転がっていかないのかなあ？」と言葉をかけ、子どもたちと一緒に考えることで、あきらめかけていた子どもたちの心にもう一度考えてみようという気持ちを起こさせた。つまり、教師がかけた言葉の中の“何で？”という言葉が、子どもたちにうまく転がらない理由を考えさせ、再び試してみようと思うきっかけになった。子どもたちがあきらめかけている時こそ、教師はすぐにヒントや答えを与えるのではなく、もう一度考えて試してみようと思えるようなかわりをしていくことが大切であると考え。

「どうやったらコースの柱が自分で立つかな？」

コースを傾斜にしたことで、ビー玉を転がすことが出来た。しかし、コースを支える牛乳パックの柱は細長く数枚のセロハンテープでつなぎ目をくっつけているだけなので安定感がない。そのため、子どもたちがコースを支えている状態である。そうすると、コースを支え続けている子どもたちから「自分も転がしたい」という声があがる。しかし、コースを支える牛乳パックなどから手を離してしまえば、コースが崩れてしまう。コースの周りでは「〇〇君、きちんと柱を支えていてよ」「(転がす役を) 変わってよ」などと言いつつ、教師のところに来て「〇〇君が転がす役を変えてくれないよ」と言ったりしている。教師は「困ったものだね。どうしたらみんなのできるようになるかなあ」と考える。遊びがすすまない中で、F男が「(柱が) 自分で立つようにしないと

みんなできないよ」と話す。F男の考えをきっかけにF男、G男、H男、I男、A男らが柱となっている牛乳パックのつなぎ目にガムテープを貼り付ける。しかし、それだけでは柱が安定することではなく、牛乳パックをつなげた柱はフラフラしている。この時もF男、G男、H男、I男、A男らは“どうすれば柱を安定させられるか？”を考えているが、なかなか考えがうかばない様子である。そこで、教師がクラスのみなにならうすればよいか聞いてみることを提案する。F男、G男、H男、I男、A男らがクラスのみなにならうしたら柱が安定するかを聞いてみる。するとA女が「牛乳パックの柱が柔らかいから硬いものを使った方がいいのでは？」、B女が「柱が高すぎるからフラフラする。低くしたらいい」と気づいたことや考えたことからアドバイスをする。F男、G男、H男、I男、A男らは、クラスの友だちのアドバイスを基に改めて素材選びを始め、再びコース作りにチャレンジする。選んだ素材が安定した柱になるかを試し、しっかりとした空き箱や硬めのヨーグルトカップを選んで使う。そして、柱の高さを調節しながらコースに滑らかな傾斜をつけ、更に柱と土台にしたテーブルの付け根をガムテープでしっかりと固定している。これにより丈夫なコースが出来上がりF男、G男、H男、I男、A男らは順番にビー玉を転がし始める。

その後、F男、G男、H男、I男、A男らは自らクラス全体の場でビー玉が目標まで転がるようになったことを話し、コースを支えるにはしっかりとやっていて丈夫なものもいいことや柱を土台の付け根にしっかりと固定することが大事であることを話す。教師はF男、G男、H男、I男、A男らが友だちの考えを聞きながら、あきらめずに作り続けたことや実際に作ってみることでわかったことを認める。また、周りの子どもたちには、アドバイスをしたことがコース作りに生かされていることを認め、みんなで考えを出し合うことの大切さについて話す。

【考察】

実践例1の「ナットをつけて回すと本当に飛んでいくのかな？」における考察を基に、子どもたちが互いの考えや気づきを出し合っているようにした。それにより、F男、G男、H男、I男、A男らが自分たちになかった友だちの発想に気づいたり、新しい考えを生み出す喜びを感じたりするきっかけとなった。こうした子どもたちの気づきや喜びが、共通の目的をもって遊びをすすめる中で疑問の解決に向けての原動力となり、遊びが深まっていくものと考え。また、F男、G男、H男、I男、A男らが自ら、ビー玉を目標まで転がせたことや作りながら気づいたことをクラス全体の場で伝えたことは、F男、G男、H男、I男、A男らの達成感や充実感の表れである。教師がこうした子どもたちの達成感や充実感に共感し、自分たちで疑問を解決したことを認めていくことも試す意欲をかき立てるきっかけづくりにつながると考える。

4. 実践を終えて

子どもたちが試すことに意欲的になるには、子どもが本来もっている好奇心や疑問を抱く心を教師が引き出し、どれだけ伸ばしてやれるかにかかっていることを再認識した。それだけに、子どもたちへの試す意欲をかき立てる教師のきっかけづくりが重要となってくる。実践を終え、試す意欲をかき立てるきっかけづくりが、どのようなかわりであるかが次の通り明らかになった。

遊びの中で用意する素材は、子どもたちにとってやってみたいと思える魅力的な素材であるとともに、疑問を抱くような素材であること。そして、こうした素材を使って子どもたちに何を気づかせたいかを教師側が明確にもっていること。安易に素材を出して試せるようにしても、子どもたちに気づきがなければ考えてみることや次に試す意欲につながらず、遊びも広がっていかない。

教師は子どもたちがいろいろとやってみようとする中でどんなことに疑問を抱いているか、また、

どんなことで行き詰まりを感じているかをしっかりと把握していくこと。そのため、一人ひとりに寄り添い、理解していくことが大切である。そうすることで子どもたちの疑問や行き詰まりに応じたかわりができる。

子どもたちがあきらめずに試していき、疑問を解決していく中で達成感や充実感をしっかりと味わえるようにすること。この達成感や充実感によって、子どもたちが繰り返し試すようになっていく。

子どもたちが個人でまたは友だちと遊ぶ中で疑問を抱いたこと、考えたこと、気づいたこと、わかったことなどをクラスで伝えることができる場を設けていくこと。そうすることで、「自分も一緒にやってみよう！」「もう一度やってみよう！」という興味や意欲を生み、友だちとやりとりをしながら試すようになるきっかけとなっていく。

上記のことを踏まえながら子どもたちにかかわっていくことで、子どもたちの試す意欲をかき立てられるのではないかと考える。

年長の子どもたちは、遊びの中で抱いた疑問に対し、友だちと考えや気づきを出し合っただけで試していくようになる。子どもは友だちとかかわり合い、ともに試したり考えたりしていくことで自分にはない考えや気づきがあることを知る。それにより、子どもの考える視野が広がり、新たな考えを出し合っただけで意欲的に試すようになる。こうした姿は年長児のあるべき姿ととらえ、大切にすべきである。

今後子どもたちの「不思議だなあ？」「どうなるのだろう？」「何でうまくいかないの？」などと疑問を抱く様子に寄り添いながら、「どうなるかやってみよう！」「一緒に試してみよう！」などと子どもの好奇心や試す意欲をかき立てる保育を実践していきたい。

<引用文献>

- 1) 篠原孝子：「保育内容環境」, 小田豊・湯川秀樹編, p. 32, 2009, 北大路書房。
- 2) 上坂元絵里：前掲書 1), p. 35